

「読書離れ」を考える

館長 谷本 哲郎

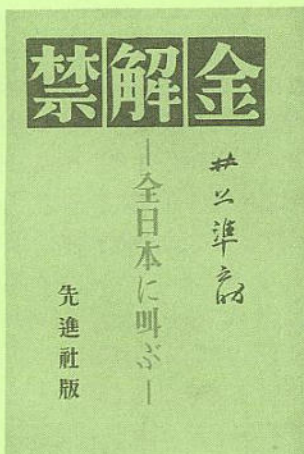
子どもたちが本を読まなくなったとか、子どもの活字離れをなんとかしなければと言われるがどうか。いつ頃の子どもたちと比較してのことなのか。これらの調査の時なぜ教科書・参考書・漫画・雑誌・新聞を除くのか。よく本を読んだ人が、自分を基準にして言っているところはないか。

いくらかの疑問はありながらも、読む者と読まない者との二極分化の傾向は顕在化し、テレビ・コンピュータ等多様な情報メディアの発達、あるいは受験勉強・塾通い・部活動による時間の不足から、読書意欲はあるにもかかわらず読まれていないのも事実であろう。しかし私はこれらの要因の他に、今の子どもたちの体験・経験の不足からくる理解の浅さ、共感・感動・空想の不足を思う。とりわけ自然体験は少なく、本を読んでも実感できないことも多かるう。集団体験・勤労体験等いずれも少ない機会しかもっていない。このような土台の欠如が読書の面白さに目覚めない原因ではないかと考えている。

それではいったい、大人たちは本を読んでいて活字離れしていないのだろうか。多くの大人たちは、「本を読みたくても、なにしろ忙しくて時間がなくてね」と答え、最近読んだ本のタイトルをあげるのにも苦しむに違いない。読め読めとすすめるよりは、読んでいる姿を見せる方が得策だ。読書の楽しさや感動の体験の少ない大人は、子どもに読書のきっかけを与えることは難しかろう。

子どもに遊びをはじめとする多くの体験を回復し、家庭に学校に読書環境が育つことが、難しい社会状況の中で読書振興を保証することになりはしないか。読書時間はないのではなく、10分でも20分でも自分でつくる努力をしたいものである。

所蔵資料から



井上準之助 『金解禁 - 全日本に叫ぶ』(先進社) 1929年

銀行の不祥事や住専の不良債権が、昨年来大きな社会問題となっているが、過去にもこのような大変な時期があった。

大正末期、長びく不況の中で倒産する企業が続出し、銀行には回収不能の不良債権が増え、経営を悪化させていた。この不況は、第1次世界大戦による好況の反動や、関東大震災などによってもたらされたものであるが、昭和2年の金融恐慌はそれに一層拍車をかけることになった。時の蔵相は高橋是清。彼とともにその鎮静化に努めたのが日銀総裁であった井上準之助である。

金融恐慌後も不景気が続く中で井上は蔵相になる。彼は不況を打開するための切札の一つとして金輸出解禁を考え、この政策を広く周知するために、講演や執筆に精力的に取り組んだが、本書もその目的で書かれたものである。彼は、緊縮財政による物価の抑制と、金本位制の再開によって自国通貨の国際的信用を高め貿易を活性化することが必要だと考えた。また国際競争に敗れ、倒産する企業も出てくるだろうが、力をつけそれを乗り越えない限り景気は回復しないと説いている。

この不況打開のシナリオは世界恐慌勃発などの誤算で失敗に終わり、彼はのちに社会疲弊を憂いた一青年に暗殺される。日本経済が大変だった時期に、経済再建に命懸けて取り組んだ人の本として、また金解禁という経済史上の転換期を知る上でも重要な一冊といえるだろう。(尾松 謙一)

生活即文学 — 網野 菊の文学世界 —

網野菊は、寡作で地味な存在ではあるが、身辺を細やかに見つめ、冷静な眼で丹念に書き続けた作家である。六歳の時に実母と生別して以来、三人の義母を迎えては死別を重ねた菊は、四人の母、異母弟妹たち、叔父叔母や従弟との極枯と別離、さらには自らの不幸な結婚と離婚、という複雑な家庭環境にありながら、敢えてそれを綴ることによって、独自の作品を生み出した。

山本健吉氏は、彼女の文学について、以下のよう述べている^①。

網野菊氏の文学にとって、養いとなったものは、まず第一に、網野家の一族の歴史である。(中略)それは主として父祖からの家系と自分の生立ちとに限られている。ただし、その家系はすこぶる錯雑をきわめていて、祖父の三人の子供たち、すなわち父と叔母と叔父のそれぞれの家の関係に、氏の義母の係累がからまって、複雑な系図を作っている。氏がこれまで書きためて来た短編、中編を、再編集することによって、そこにはある同族の三代にわたる歴史と、彼女自身の自己形成の過程とが、おのずから浮び上ってくるだろう。

網野菊(1900-1978)は、東京麻布の馬具製造販売業の家の長女として生まれた。千代田高女を経て、日本女子大学英文科に入学。同級には中条(宮本)百合子、丹野(野町)禎子がおり、少なからず文学的影響を受けた。卒業の年(大正9年)、短編集『秋』を自費出版。大正12年、早大露文科の聴講生だった菊は、一年上級の湯浅芳子とともに福島県の信夫高湯温泉に旅行中、関東大震災を知った。東京に戻ることでできない二人は、やむなく芳子の郷里である京都に向かう。その折、「一期の思い出に」と、かねてより憧れていた志賀直哉を訪問。生涯の師と出会うのである。

この時のことは、志賀にとっても印象深かったらしく、次のように回想している^②。

網野さんは少しそはそはしながら、原稿を見せてくれといった。

私は三十枚以内ならば見ようと答へた。(中略)

網野さんは、五十枚位かも知れないといった。五十枚でも見ませうと答へたが、網野さんについて、何も知らない私は、全然期待がなかったから、実は五十枚は少し閉口してゐた。(中略)

網野さんは、余り長居はしなかつた。その多分帰る際であつたか、風呂敷から原稿を取出し、若しかしたら八十枚位あるかも知れないといった。段々ふえて来るのがをかしかつた。

所が実際受取つて見ると、百二十枚あつたには少し驚いた。「これは大変だ」といつて笑つた。私は網野さんに一杯食はされたわけだが、網野さんは少しもそんな顔をしてゐなかつたし、私もそんな気がしなかつた。(中略)

幾日かの後、私は読んで見た。読み出すと、ずんずん読ます力があつた。(中略)その作品の出来ばえがいいといふよりも、作家としての素質を持った人だといふ気のした事が愉快だつた。素直で、いぢげず、気持ちの動き方がデリケートで、その現し方は線の太い感じだつた。都会人らしい洗練された感じと、行き届いた理解とがある。兎に角安心して読んでゐられることが愉快だつた。

この原稿が、のちに志賀の推薦によって、『中央公論』に発表された「光子」である。菊自身も、「大震災という事がなかったら、そして今生の思い出というような考えがなかったら、中々、先生をお訪ねする勇氣は出なかつたであろう^③」と述べているが、つくづく人と人との縁は不思議なものである。

大正15年秋、奈良幸町に移った志賀直哉の勧めにより来寧。しばらく志賀家に滞在した。その後、菊は、破石町及び氷室神社脇で昭和3年5月まで過ごすことになる。

奈良時代のことは、随筆集『雪晴れ—志賀直哉先生の思い出』^④の第一章に詳しい。

私の住居探しには、志賀先生の御一家が散歩がてら行って下さった。その一行の中には当時矢張り奈良に住んで居られた武者小路さんが加わって下さった（と云うより、加えさせられていらしたという方が適切である）事もある。



（中略）東の窓からは若草山と御蓋森、南の窓からは高円山が、居ながら見えた。（中略）

私はこの破石の家の二階から見える高円山が大好きだった。万葉集に歌に「たかまどのぬべのあきはぎいたづらに咲か散るらむ見る人なしに」というのががあるが、この歌をチョイチョイ思い出した。この歌は元来は高円に宮居された志貴皇子への挽歌であるが、私は、これを自分の青春への挽歌のように思いなして、二階の窓から高円山を見てはこの歌を心の中に口ずさみ、感傷に浸った。（「奈良で」より）

この随想の中で、菊は、奈良時代の生活について、次のように位置づけている。

奈良での二年間は、私にとって、いろいろの意味での留学時代と云ってもいいようだ。（中略）学生時代には、文学でも音楽でも、西洋のものに心ひかれることが多くて、日本の古典に接することが少なかった。その補いを奈良生活はしてくれたようだ。（「嫩草山の山焼き」より）

あとがきには、「我が生涯の最良の日々のかたみ」とある。暖かく受け入れてくれた先生や夫人とのふれあい、さらに、先生のもとに集う武者小路実篤や滝井孝作らとの語らいの日々は、菊にとって、珠玉ともいえる楽しく意義深い時間だったのだろう。『雪晴れ』は、終生心の支えとなった師、志賀直哉への思いに溢れた作品集となっている。

また彼女は、別の作品の中で、自分が不幸にそこなわれないでいられるのは、長年親しんできた「文学」と恩師のおかげであり、恩師の、その夫

人に対する「愛情のコンスタンシー」と「考え方の節操」というものを知って、この世に「ひとへの信用の不変」というものが実在することを教えられ、救われた、とも述べている^④。

逃れようのない運命にじっと耐えながら、その厭うべき暗い世界を静かに見つめ、深く掘り下げようとした菊。それは同時に、自分の生を確かめる作業でもあった。

代表的な作品として、最初の義母の死を描いた『光子』、幼い日から大学入学にいたるまでを自伝的にまとめた作品集『ゆるる葦』、母ちがいの妹の病気の始終とその死を扱った『さくらの花』、歌舞伎役者、八世市川団蔵の入水に、自身の境涯を重ね合わせた『一期一会』などがあげられる。

最近になって、菊の作品がまた見直され、ようやく文庫本が刊行された。「自己抑制によって、生活即文学を完成」^⑤させたといわれる上質の網野作品に、触れる機会が増すのは嬉しいことである。

奈良に滞在中、菊は、家の二階の窓から見える高円山が大好きだったという。春の陽ざしのなか、この山を眺めるとき、静かにつつましく生きて、小さいけれど見事に「花」を咲かせた一人の女性が偲ばれて感慨深い。

《引用文献》

- ① 「解説」(『網野菊全集』第3巻 講談社 昭和44年) ※当館未所蔵
- ② 「『光子』の著書」(『志賀直哉全集』第7巻 岩波書店 昭和49年)
- ③ 「震災の年」「奈良で」「嫩草山の山焼き」(『雪晴れ』 皆美社 昭和48年)
- ④ 「風呂敷」(『現代日本小説大系』第57巻 河出書房新社 昭和27年) ※当館未所蔵
- ⑤ 「網野菊追悼」円地文子著(『群像』33巻7号)

《主要参考文献》

- ・『明治・大正・昭和の女流文学』板垣直子著(桜楓社 昭和42年)
- ・『物語女流文壇史』巖谷大四著(中央公論社 昭和52年)
- ・『石路の花』広津桃子著(講談社 昭和56年) ※当館未所蔵
- ・「ゆるる葦」(『解釈と鑑賞』37巻3号)
- ・「網野菊 山茶花のひと」(『国文学』24巻4号)
- ・「『一期一会』について」(『解釈と鑑賞』50巻10号)
- ・「甘えを拒みつつ人生を描いたひと、網野菊」(『月刊奈良』連載「近代文学の中の奈良」37)

(整理係 中野貴世子)

近年、陵墓に対する関心が高まりつつある。とくに「陵墓の公開」をめぐるのは新聞紙上でも取り上げられており、例えば「天皇陵を考える」①～⑤(『朝日新聞』夕刊 1995年11月13～17日連載)をはじめ、奈良市佐紀盾列古墳群にある成務天皇陵(佐紀石塚山古墳)の初の墳丘立ち入りをめぐる記事(同紙 同年11月25～26日)や与謝野馨氏の「宮内庁は天皇陵を調査すべきだ」という「論壇」投稿記事(同紙 同年12月31日)、さらに「窓 解説委員室から」(同紙 夕刊1996年1月29日)の「天皇陵古墳」など、最近の『朝日新聞』を拾ってみただけでもこれほど多くの記事が取り上げられていて陵墓に対する関心の高さを示している。

この「陵墓の公開」をめぐる背景には陵墓の考古学的な学術調査が全く出来ないという点がある。だが最近、成務天皇陵が一部公開されたことにより陵墓の全面公開への新たな動きとして研究者の間では関心を寄せている。

こうした陵墓研究をとりまく状況のなかで、最

近、二冊の研究書が出版された。一つは『「陵墓」からみた日本史』(日本史研究会・京都民科歴史部会編 青木書店 1995年11月発行)で、もう一つは『天皇陵古墳』(森浩一編 大巧社 1996年1月発行)である。二冊とも現在の陵墓研究の水準を示すものとして注目されている。

『「陵墓」からみた日本史』は、一昨年12月に行なわれたシンポジウムを骨子としており、和田萃の基調報告「「陵墓」治定の問題点」「問題提起」「討論」のほか、「研究ノート」「コラム」を加えた構成で、16名の執筆者からなっているが、何といても本書の大きな特徴は、文献史学と考古学とが合同ではじめて「陵墓」に取り組んだ点であろう。しかも陵墓を単にそれが築造された時代を知るための史料と見るだけでなく、「それが今日まで、(中略)いかなる同時代的意味をもって伝えられてきたのか、それを解明しようと考えた」(「刊行にあたって」)という点で、本書は従来の類書にない一味違う切り口となっている。

少し内容を紹介しておく、和田萃の基調報

最近の陵墓研究とその成果

告は最近の陵墓研究の現状と課題を包括的に整理されたもので、例えば、神武陵については、『日本書紀』に壬申の乱のさなかに神武陵に奉幣したという有名な記述があることから、近年見つかった四条古墳群のどれかと結びついていた可能性が高いこと、また奈良時代末から平安時代初めに従来の喪葬観念に大きな変化が起こり、陵墓に対する尊敬の念が薄れ、陵墓の所在地が不明になったり、伝承が失われていく。それとともに11世紀後半 頃から盗掘が行なわれるようになったこと、幕府の元禄修陵のさいに奈良奉行所が行なった陵墓調査はかなり杜撰な面があったことなどいずれも示唆的で興味深い。なお、巻末の参考文献は便利であり、一昨年、当室で作成した目録「郷土資料室貴重資料展 絵図に見る江戸時代の「陵墓」探索と修理」も収録されている。

『天皇陵古墳』は、森浩一「考古学と天皇陵」をはじめ、「日本古代・中世の陵墓」「中国の皇帝陵」「朝鮮半島の王陵」のほか、第Ⅱ部「天皇陵古墳関係資料」として「基本文献解題」「天皇陵

古墳解説」「歴史的人物の没年と没所」から構成されている。とくに本書は天皇陵古墳についての従来からの成果を集大成したもので、東アジア的視点も取り入れ、現段階までの被葬者の確定をするなど興味深くまとめられている。例えば、成務天皇陵にあたる佐紀石塚山古墳で幕末に起こった有名な盗掘事件のことや、聖武天皇「佐保山南陵」とされる法蓮北畑古墳も聖武陵と比定するには疑問点が多いこと、四条古墳の確認は神武陵として幕末に治定されたミサンザイ(神武田)と綏靖陵の塚山を見直す契機となったことなどがわかる。

いずれにしても天皇陵古墳は参考地の大半を含め約80基が該当するという。しかしこれらのうち、天武・持統天皇陵と天智天皇陵の2基以外は確認がないうえ、見瀬丸山古墳や河内大塚山古墳など巨大な前方後円墳が参考地指定であるなど不明な点も多く、陵墓治定の見直しを含めた考古学的学術調査の必要性が求められている。

(郷土資料室 山上 豊)

日本人の宗教

講師：国際日本文化研究センター教授 山折哲雄

つい先日、私はイスラエルの旅から帰ってまいりました。私は今度の旅で、イエス・キリストの歩いた道を足早に辿ってきました。テルアビブから北上しまして、ナザレ、その東部のガリラヤ、さらにヨルダン川沿いに南下を致しましてエルサレムに入るという一週間の旅でありました。今回の旅での印象は、行けども行けども砂漠の国だなということでした。一切の緑がない、自然の移ろいもない。そのような荒涼とした風景を目の当たりにして、ユダヤ民族、あるいはキリスト教徒たちにとって、地上で信用出来る物は一つもないのだな、彼らは必然的に天上の唯一の神を信ずる以外なかったのではないかと、我々のような多神教的な世界に育った人間には到底理解出来ない宗教世界ではないかと、絶望にも似た思いを深くしてまいりました。

このような一神教の世界と比較して、我々日本人の伝統的な宗教観を考えると、あまりの違いに驚かされます。しかし、21世紀にかけて、日本人の宗教心は不思議な力、輝きを示し始めるのではないかとという予感も他方では持ちます。そこで、我々の宗教心の由来、歴史を今一度振り返って見たいと思います。

私の出身地は岩手県の花巻です。宮澤賢治の生家とは200メートル位しか離れておらず、子どもの頃母親から生前の賢治のことについて、色々聞かされておりました。賢治は熱心な日蓮宗信者で、冬になりますと白装束に身を固めて「南無妙法蓮華経」を唱えながら町から町へと寒行に出たと言っているのです。ところが、彼が寒行して行く後ろ姿に対して、土地の人々はどのようなことを言っていたか…。「気狂い賢治」と罵声を浴びせていたという。この話を母親から聞かされて、私は大変なショックを受けました。今にして思うのですが、どうも日本人というのは宗教的に過激な行動をとった人間を認めたくないというような性向があるのではないかと。ちょうど最近のオウム真理教の過激な行動を決して認めないように…。

しかし、賢治は決して偏狭な宗教者ではありませんでした。賢治の父宮澤政次郎は敬虔な浄土真宗の信者で、毎年のように京都から暁烏敏を呼んで講座を開いており、賢治もその末席で聞いていた。やがて彼は日蓮宗に転派しますが、決して日蓮信者として死んでいったのではないと思うのです。

賢治の有名な詩に「雨ニモマケズ」がありますが、晩年の「手帳」のこの詩が記された前後を詳細に見てみますと、「南無妙法蓮華経」という文字で埋め尽くされています。その一方、行間には病気の苦しみ、死への恐怖が書き連ねてあります。彼が死への恐怖から何とか逃がれようとして日蓮の題目を書きつけていたことがよく判ります。

また、この詩には「デクノボー」に「ナリタイ」という言葉が出てまいります。このデクノボーのモデルを、私は当時彼の周辺にいたキリスト者、斉藤宗次郎ではなかったかと思っています。彼は花巻の曹洞宗のお寺の出で、小学校の訓導をしておりましたが、内村鑑三の影響を受けキリスト教に改宗。内村を花巻に呼んで非戦講演会を行ったことが原因で学校を去る事になりますが、牛乳配達や新聞配達をする傍ら、キリスト者としての実践活動を行っています。当時賢治は花巻の農学校の教師でありましたが、宗次郎は農学校へ賢治を訪ねて行ってよくお喋りをしていたという。賢治がキリスト教に対して深い理解を示し、彼をいかに尊敬していたかは宗次郎の日記からうかがうことが出来ます。また、賢治のキリスト教理解は『銀河鉄道の夜』にも表れており、彼のなかには色々な宗教的な世界が混在していたようで、従来の日蓮信者賢治というイメージは大きく改められなければならないのではないかと私は思っています。

今年は阪神大震災、オウム真理教事件と大きな事件が続きました。これらの事件にふれて、私はマスコミの方々の取材攻勢を受けることになりました。その過程で私は不思議なことに気付いたのです。それは、彼らのほとんどの人が宗教に無関心で、漠然とした無神論者だったと言いうことです。マスコミの方々だけではなく、大部分の日本人がそのような傾向を示しつつあるということではないでしょうか。日本社会は何時の間にか無宗教的で、世俗的な状況を迎えることになってしまっていたということなのです。

今年の夏、ある友人からこんな話を聞きました。彼は臨済宗のお坊さんなのですが、檀家さん方を連れてカナダへ旅をした。入国に際して、税関の係官に汝の宗教は何か、と聞かれたというんです。そこで彼は坊さんですから、当然のこと仏教徒ですと答えたと。ところが檀家総代の方が同じ質問を受けて「無神論者です」と答えてしまった。それ

をきいた係官は、無神論者は入国させる訳にいかないといった。困ったすえ、住職は「日本には無という名の宗教があり、彼はその信者です」と答え、事なきを得たというのです。この話は日本人の宗教的な心象風景をよく説明している話だと思います。

ご多分にもれず、私も学生時代にマルクスかぶれをしまして無神論者でした。友人たちにも唯物論者が多かった。ところが、50、60代になりますと、いっばしの唯物論者たちが私の所へやってきて、年だからお墓をつくらにゃいかん、親父が死んで遺骨をどうにかしなきゃならん相談ののてくれというようになった。この話からも判るように、日本人の多くが実にお墓、遺骨に強いこだわりを示している。世界の様々な文化圏の中で遺骨にこれだけのこだわりを示す民族は他にないと思います。そこで私が考えた日本人の宗教心を要約しますと、「宗教嫌いのお墓好き」「信仰嫌いのお骨好き」こういうことになりそうです。これは、平均的な日本人の平均的な宗教観といえるのではないのでしょうか。

それでは、何故このような日本人の宗教観が出来上がってしまったのでしょうか。私は二つの大きな理由があったと考えています。16世紀に織田信長が行った仕事が第一の大きな要因といえましょう。古代から日本国家の精神を支えてきたのは比叡山の天台仏教でしたが、元亀年間に信長はその比叡山を焼き討ちにして、旧仏教の権威を地に引きずり下ろした。以後、比叡山の宗教的権威は蘇ることなくしだいに世俗化していった。また、信長は天正年間には一向一揆を徹底的にせん滅しています。各地の一向一揆を根絶し、総本山の石山本願寺を攻め滅ぼして民衆の宗教運動の息の根を止めてしまった。その結果仏教は、江戸時代の檀家制度に見られるように、幕府の政治のための思想的な受け皿として、その中に組み込まれてしまい、葬式仏教へと変質していったのです。

二つ目の要因は、明治の宗教政策であったと私は思います。伊藤博文は明治国家の基礎を築いた一人ですが、彼は欧州視察で、西欧の近代国家を支えている根底にはキリスト教の精神原理があることを見せつけられ、我が国の近代国家形成にあたってはそれなりの精神原理をつくりあげなければならないということを痛感して帰国する。しかし、仏教や神道などの伝統的宗教はすでに無力化していると認識した彼は、それに代わるものとして天皇制をもって来る訳です。ところで、明治国家は富国強兵・文明開化路線を進める上で、西欧文明を取り入れて行きます。そのような中で宗教とはどれか一つの信仰を主体的に選択することだというキリスト教の一神教的な考え方が広く

浸透し、そのため自分たちが伝統的に信じてきた多神教的なあり方は、本当の宗教ではないかもしれないというように自信を持ってなくなってしまった。このことも今日の日本社会における無神論的な風潮へとつながってきているのではないかと思います。

私は、これまで日本人の宗教心の否定的な側面を強調してお話をしてきたようです。しかし、今後は何とかこういう西欧中心の考え方を逆転させなければいけないでしょう。

阪神大震災が起こりましたときに、私が最初に思い出した思想家は寺田寅彦でした。彼をご承知のように、地震学者であり「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉でもよく知られています。また、漱石の愛弟子の一人で随筆も数多く残しております。彼の最晩年の作品に「日本人の自然観」という文章がありますが、ここには彼の思想の結晶が表われていると私は思います。彼はこの中で、西欧と日本の自然を比較次のように述べています。西欧で、自然を客観的に観察、計量する分析的な科学や自然制御の考え方が発達したのは、西洋の自然が比較的安定しているからだ。しかし日本では、地震、津波、台風などに見られるように、自然は極めて不安定である。日本人は、このような自然の特異性を深く認識、自覚した上で自然に逆らわずに生きる工夫、それに順応するための経験的な知識を蓄積してきた。ここに、日本人の自然観、日本の科学の特色がある、と。さらに寅彦は、日本人の精神性にも目をむけ、日本人にとっては自然災害を引き起こす山や川も一つ一つが神であり人であったといい、そこから日本人に「天然の無常」という感覚が育ったのだという。これは仏教の無常観と結びついて遠い祖先からの遺伝的記憶となって五臓六腑にしみ渡っているのだと日本人の宗教観の根底まで見通しています。

いっぽう、寺田寅彦と同じ時期に、日本人の性格を風土の観点から説明しようとした人に和辻哲郎がいますが、寅彦の方がはるかに日本の自然と日本人の精神性を深くとらえていたと思います。私は、今こそ寅彦が浮き彫りにした日本人の宗教観に目をむけ、注目する必要があるだろうと思うのです。日本人がますます世俗化の度合いを深めていくように見える今日、我々は日本の文化や宗教伝統をもうすこし長い時間的な幅で再評価していく、ものすごく大事な時に来ているのではないかと。そういう反省を通してこそ、宗教の異常な事件に対処する、我々の心構えをつくり上げていくことも出来るのではないかと考えております。もうすこし寺田寅彦に学んではどうでしょうか、と申し上げて今日の話を終らせていただきます。

(文責 森川 博之)

□ 閲覧室 □

Q コールリッジの「老水夫のゆくえ」の訳書について

A ある著作が翻訳されているか、翻訳書名は何かというか、また翻訳された著作の原題を知りたい、といった翻訳書に関する質問がしばしば寄せられます。

コールリッジ、サミュエル・テイラー（1772～1834）はイギリスの詩人。「老水夫の歌」はその代表作とされているバラードです。

翻訳文学を網羅的に収録した目録としては戦後刊行された翻訳小説・戯曲を集めた『翻訳小説全情報 45/92』（日外アソシエーツ）、国会図書館が所蔵する明治元年から昭和30年までの翻訳文学を収める『明治・大正・昭和翻訳文学目録』（国立国会図書館編 風間書房 1984）があり、これによれば、コールリッジの翻訳書として『コールリッジ談話集』（岡本昌夫訳 弘文堂 1943）ほか数冊の著作があります。さらに「老水夫のゆくえ」を収録するものを、『年表英米文学史—翻訳書併記』（荒竹出版 1975）、『英米文学翻訳書目—各作家研究書目付』（沖積舎 1990）などで検索すると、原題は「The Rime of the Ancient Mariner」で『コウルリヂ詩選』（斎藤勇訳 岩波文庫 1955）に「老水夫行」として収録されているほか、『老水夫の唄』（高山宏訳 ゴシック叢書 国書刊行会 1984）など数冊の翻訳のあることが判ります。

文学以外のジャンルや、あたらしい翻訳書については『翻訳図書目録』（日外アソシエーツ）などが全分野を対象として年次を追って刊行されています。（館内奉仕第1係 井上はるみ）

□ 児童室 □

Q サンタクロースの住所を知りたい

A クリスマスを前にしたある日、他の図書館を通じて電話で問い合わせがありました。「サンタクロースは本当にいるのですか？」という質問には、かつてニューヨーク・サン新聞がすばらしい社説で答えを返しましたが（『サンタクロースっているんでしょうか？』中村妙子訳/東逸子絵 借成社刊参照）、さて、その住所となればどこになるのでしょうか。早速調べてみました。

実はサンタクロースの住所はどうやら1ヶ所ではなく、しかも日本から送られる手紙に関して少々困った問題も起きているようです。

まずフィンランドには、昔からロシア国境にあるコルバトゥントゥリ山にサンタが住んでいるという伝承があり、同国のラップランド県ロバニエミ市にサンタクロース村があります。この村のサンタクロース郵便局が、子ども達からの手紙の返事としてサンタクロースからのクリスマスカードを送ってくれるのですが、最近日本からの商売目的の手紙が大量に送られ迷惑をかけているようです。また手紙は日本語でもいいのですが宛名・宛先はローマ字で。そして300円分の国際返信切手券（郵便局で購入）を同封する必要があります。宛先は Mr. Santa Claus Finland.

そしてもう1ヶ所、スウェーデンのモーラ市にはサンタワールドがあります。こちらにはサンタのおもちゃ工場もあります。手紙に関しては、横浜市中区のサンタピア委員会へ問い合わせして下さい。

《参考資料》『世界の子どもたち 13 フィンランド』（借成社 1986）『朝日新聞』（'95.12.3）『6年の学習』（学研 '95.12）『サンタクロースのふるさと』（世界文化社 1986）

（児童室 小西 雅子）

所蔵資料の遡及入力について

前号でご紹介しましたように、昨年3月奈良県立図書館整備基本構想が策定されました。これにともない、当館では、今年度から所蔵資料の書誌データベース構築にむけて遡及入力を開始しました。

データ構築は、学術情報センターの共同目録作成事業へ参加し、所蔵資料データの登録と蓄積を行うというかたちを採用しました。本年度からの長期5カ年計画を予定しており、本年度は当館閲覧室の開架図書と書庫内図書の一部に取りかかっています。

来年度以降は、引き続き書庫内図書のデータ入力を中心に行うとともに、順次郷土資料室図書や逐次刊行物、県立橿原図書館図書へと進めていく予定です。

受贈

昨年11月、故秋永政孝氏の夫人脩子氏から貴重な資料を多数ご寄贈いただきました。秋永氏は、県教育委員会文化財保存課長、県立大宇陀高等学校長、県立畷傍高等学校長や奈良文化女子短期大学教授などを歴任されるかたわら、『奈良県県政70年史』や『天理市史』『橿原市史』『王寺町史』など、数多くの地域史、市町村史編纂にも尽力されました。

ご寄贈いただいた資料は、『寧楽遺文』『鎌倉遺文』はじめ歴史研究の基本図書、『史学雑誌』『歴史手帖』『大和文化研究』などの雑誌、市町村史編纂のための原資・史料の写しなど多岐にわたっています。

利用者の皆様の調査・研究に大いに役立つものと期待されます。

郷土資料室受入県内発行資料目録

— 抜 粋 —

(1995.8～96.1)

主 題	資 料 名	著 (編) 者	発 行 者	発行年月
総 記 宗 教	奈良国立博物館百年の歩み	奈良国立博物館	奈良国立博物館	1995. 4
	奈良県宗教法人名簿 平成7年3月現在	奈良県総務部文書学事課	奈良県総務部文書学事課	1995. 3
	春日文化3 春日オープンセミナー講演論集 彫の響き	杉村良雄	春日大社 〔春日田楽座〕	1995. 7 1993. 3
歴 史	稿本天理教教組伝逸話篇 東大寺成巻文書1～7	天理教教会本部	天理教教会本部 東大寺図書館	1994. 9 1951～52
	斑鳩藤ノ古墳第2・3次調査報告書 調査報告篇・考察篇・図版篇	奈良県立橿原考古学研究所	奈良県立橿原考古学研究所	1993. 10
	斑鳩藤ノ古墳第2・3次調査報告書 分析と技術篇	奈良県立橿原考古学研究所	奈良県立橿原考古学研究所	〃
地 理	奈良県年鑑 1996	奈良新聞社	奈良新聞社	1995. 10
	榛原町史 本編	榛原町史編集委員会	榛原町役場	1993. 3
	『元禄年間山陵記録』	秋山日出雄、廣吉壽彦	由良大和古代文化研究協会	1994. 3
経 済	奈良県下商工業及名所案内記 飛鳥めぐり 大和路	奈良県下商工業案内記編纂所 猪熊兼繁	奈良県下商工業案内記編纂所 近畿観光会	1902. 12 1941. 6
	奈良県中小企業団体名簿 平成6年12月31日現在	奈良県商工労働部商工課	奈良県商工労働部商工課	1995. 3
統 計 社 会	奈良銀行四十年史	奈良銀行人事部	奈良銀行	1994. 3
	桜井市統計書 平成6年版	桜井市産業部商工観光課	桜井市	1995. 7
教 育	花ひらく ならの女性生活史	ならの女性生活史編さん委員会	奈良県女性センター	1995. 10
	学校週5日制調査研究協力校実践事例 奈良産業大学十年史	奈良県教育委員会 奈良産業大学	奈良県教育委員会 奈良産業大学	1995. 3 1994. 11
民 俗 自 然	奈良の年中行事	奈良市観光協会	奈良市観光協会	1991. 3
	大台ヶ原山の自然観察	「大台ヶ原山の自然観察」 編集委員会	日本自然保護協会	1977
医 学 建 築	会員名簿 平成6年6月1日現在	奈良県医師会	奈良県医師会	1994. 6
	アントニオ・ガウディ展 世界建築博 覧会第2回イベント トリエンナー レ奈良'95	総合美術研究所	総合美術研究所	1995
産 業	関西イベントファイル 1995		関西情報発信機能強化推進協議会	1995. 4
	創立二十周年記念誌 大和山林会報 17～18	奈良県花き植木農業協同組合 大和山林会	奈良県花き植木農業協同組合 大和山林会	— 1905. 6～7
芸 術	春日大社宝室展	奈良国立博物館	奈良国立博物館	1995. 6
	正倉院展 第47回 平成7年 黒滝村の仏像 黒滝村文化財調査報告書 遊「遊」のある奈良県 100 選写真集	奈良国立博物館 奈良県教育委員会文化財保存課	奈良国立博物館 黒滝村教育委員会	1995. 10 1995. 3
文 学	天理図書館綿谷文庫俳書集成 11	天理図書館綿谷文庫俳書集 成編集委員会	天理大学出版部	1995. 1 1995. 12
	五十年前の私 終戦五十周年記念	月ヶ瀬村梅寿会	月ヶ瀬村梅寿会	1995. 8

利 用 案 内

開館時間	閲覧室、読書室、学生室	9:00～20:00
	郷土・行政・文化財資料室、児童室	9:00～17:00
休館日	月曜日・祝日・月末・年末年始・ばく書期(春季約2週間)	

奈良県立奈良図書館報 うんてい No.66 平成8年3月30日発行

〈発行人〉 谷本 哲郎 〈発行所〉 奈良県立奈良図書館 ☎630 奈良市登大路町 ☎0742 (27) 0801